

資本市場のグローバル化とドイツ型企業統治構造の変容

風 間 信 隆

研究実施状況

1990年代以降、世界的に、当初は企業の不祥事の多発を背景として、その後グローバル経済の進展をも背景として国際競争力の強化を目指す経営者の監視・コントロールのあり方を問い直す

コーポレート・ガバナンス（企業統治）構造の変革の必要性が大きな関心と議論を集めている。ドイツにおいても従来の労使共同決定・金融支配・企業間の株式の相互持合いを背景として、監査役会（Aufsichtsrat）による業務執行経営者（Vorstand）に対する内部監視を中心とする、伝統的なドイツ型企业統治構造の転換の必要性が叫ばれて来た。このため、ドイツでも、資本市場における外国人機関投資家の台頭をも背景として経営の透明性を高め、監視機能を強化するための企業統治改革が押し進められてきた。しかし、確かにこうした経営の透明性を高め、監視機能を強化するトップ・マネジメント組織の改革の必要性を否定するものではないにしても、現実にドイツ資本市場の構造的変化、とくに外国人機関投資家の台頭がどのように進展しているのか、それがどのような要求を経営に突きつけているのかを解明した研究は少ない。本研究は、これまでの内部監視を中心とする変革よりもドイツ企業に対する外部監視メカニズムを解明し、それがどのように内部監視メカニズムと連動しているのかを明らかにすることを課題としている。またこれは従来のドイツ労使共同決定制度にいかなる変化を要請しているのか、労働組合はこれにどのように対応しているのかを解明しようとする研究である点に最大の特色を認めるものである。

こうした研究目的を達成するために、11月にはドイツに出張し、1990年代以降のドイツ資本市場や共同決定に関する実証的データを大規模なデータバンクとして保有している、ケルンのマックス・プランク社会学研究所を訪問し、同研究所のマルティン・ヘプナー氏（Dr. Martin Höpner）及びフィリップ・クラゲス氏（Philipp Klages）との研究協力ネットワークを作ることができた。今後、同研究所のデータバンクを利用することでドイツ資本市場の構造的変化についての実証的研究を行う研究データ入手が期待されうる。また上記研究課題を実現するため、ドイツ資本市場が1990年代以降どのように変容し、この変容がドイツ固有の共同決定と大企業の経営戦略にいかなる影響を及ぼしているのかを実証的に解明している著書、*Rainer Zugehör Die Zukunft der rheinischen Kapitalismus*, Leske+Budrich, Opladen, 2003の翻訳作業を行い、これを風間信隆監訳 風間信隆・松田 健・清水一之訳『ライン型資本主義の将来：資本市場・共同決定・企業統治』（文真堂刊、2008年9月）として刊行した。さらにはドイツを含むコーポレート・ガバナンスの国際比較の観点から21世紀のコーポレート・ガバナンスのあり方を展望した論文「21世紀のコーポレート・ガバナンスの課題と展望」（海道ノブチカ・風間信隆編著『コーポレート・ガバナンスと経営学』終章所収、ミネルヴァ書房、2009年3月刊行予定）を執筆した。